

かつた。

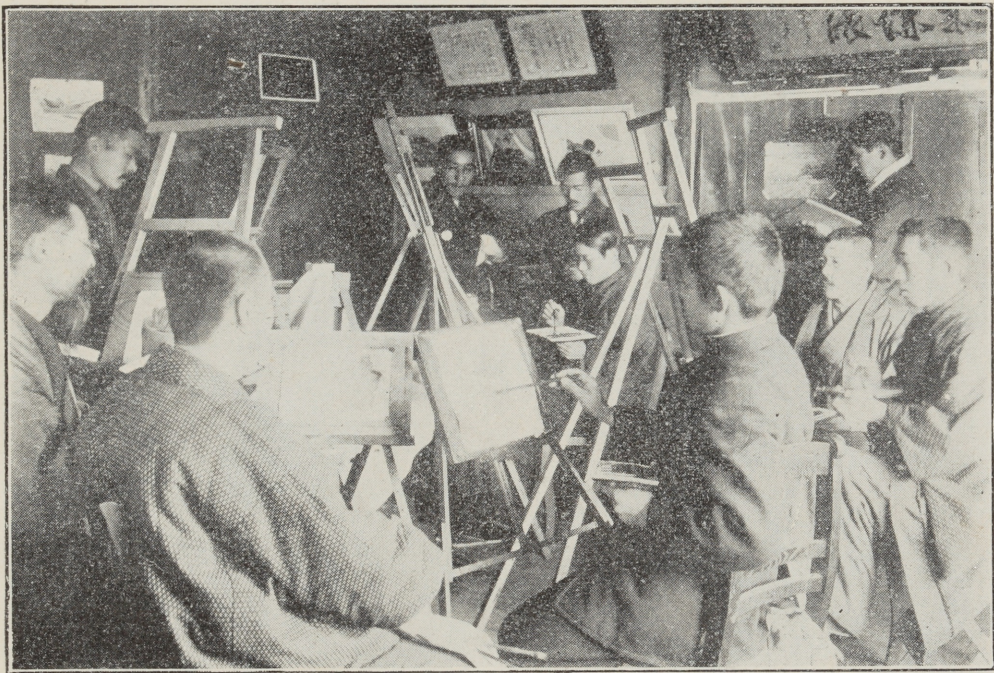
二十一日 霧晴

秋のやうに涼しい朝だ。緑の山はうすく霧がかゝつて、遠くにあるやうに、四方が馬鹿に廣く見える。草の中には、萱草の黄ろい花がつゞましげに咲いてゐる。紫の花も紅い花もちら／＼見える。こうした風情ある眺めを見ると、都へ歸るのが厭にもなる。伊香保で人夫に別れて俵へ乗る、速いことは驚くばかりで、タツタ四十五分で澁川へ着いた、こゝでM君は高崎の方へ、自分はヤハリ前橋へと、馬車の厄介になつて、夕方蒸暑い東京へ歸つた。

(完)

名家談片

○ セザンヌは、生きてゐるうちは悪魔のやうに言はれて、死んぢやつてから二三年しきやならないのに、畫きかけの水彩畫が一枚二萬フ



(町 槻 高 府 阪 大) 員 會 會 幽 園

ランもしてゐるさうだ。不遇な繪かきは皆んな死ぬに限る。

○ 世間に評判のいゝ人には、トカク悪口を言ふ反對の一派があるもんだ、だが、評判は偶然ではない、悪口をいふ人達よりも屹度よいのに極まつてゐるよ。

○ 鶏に卵を抱かせて、二三日で孵るといふ時、養鶏の書物を見たら、濕り氣を與へるため、巢の傍に土を入れて置いと書いてあつた。それから赤土を入れてやつたら、其重みで繩が切れて、高い處から箱が墮ちた、十ばかりの卵は破れて了つたと、何かに書いてあつた。眞面目に勉強してゐる人間に、つまらぬことを云ふて——それがよし眞理でも——迷はずと、そんな結果にならないとも限らない。

○ 他人は他人己れは己れと、時流に超越して黙つて勉強してゐる奴が一番恐ろしいな。